

第1章 本年度総括

本年度事業によってもたらされた成果・課題・改善案について総括を行う。

第1節 本島→離島版 総括

第1項 取組概要

本年度は24校46クラス児童1214名を11離島・地域に派遣した。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）が5類感染症に移行し、コロナ禍に減少していた観光客や教育旅行の受入れが徐々に戻りつつある中での実施となった。コロナ禍での安全・安心な受け入れ体制の構築に重点を置いた前年度に対して、本年度はコロナ対策ができていることを前提とした上で、受け入れ体制の構築・強化や体験プログラムの開発・質の向上等に取り組んだ。

第2項 受入離島・地域

1. 成果

高齢化やコロナの影響でどの離島でも民泊民家や体験プログラムガイドが減少しているため、これらの人材の確保・育成に重点を置くと同時に、無理のない受け入れができるよう調整を行った。派遣計画段階から各離島の受入れキャパシティに沿った規模の学校を割り当てたことで、人材不足の中でも無理がない受け入れを実現することができた。コロナ前と比較して教育旅行の受入れ数が大幅に減少している池間島と伊良部島では、2地域合同での受け入れを実施したことで、各地域の負担軽減に繋がった。

伊平屋島・伊江島・久米島・渡嘉敷島の4離島では、これまで事業に携わってこなかった組織や事業者との協力体制を構築し、新規プログラムを開発することができた。既存のプログラムにおいても、若手の人材がガイド見習いとして参画し、ベテランのガイドから教わりつつプログラムを進行するという場面が複数の離島で見られ、新規ガイドを育成することができた。また、子ども会や老人会との交流会を積極的に導入し、短時間でも受け入れに関わってもらうことで本事業の認知度の向上や今後の人材確保にも寄与することができた。

伊是名島・久米島・西表島干立の3離島・地域では複数のプログラムに共通のテーマを設定して派遣行程にストーリー性を持たせる試みを行い、参加した児童や教諭から好評を得た。

伊平屋島・伊是名島・伊江島・池間島・宮古島城辺・伊良部島・石垣島・与那国島ではコーディネーターの世代交代が始まっており、経験の浅いコーディネーターが受け入れの企画・運営を行った。慣れない間はベテランのコーディネーターが付き添い、事務局やファシリテーターがサポートを行うことで、大きなトラブルなく派遣を終え、次世代のコーディネーターの成長も見られた。

また、コーディネーターを対象とした研修を複数回行い、アレルギー対応などの安全・安心のための基礎知識や、LGBTQのような時代の変化に応じて求められる知識などの習得を促した。該当する児童の参加もあり、離島側から安堵の声が挙がった。

2. 課題・改善案

民泊民家や体験プログラムガイドの人材不足は前年度に引き続き課題である。民泊民家に関しては、コロナやインフルエンザへの感染を理由に予定していた受入れ民家が変更となるケースが本年度に数回発生しており、万が一の備えとしても人材確保の重要性は高い。引き続き受け入れ体制の強化が求められる。また、コロナ後、各離島の体験プログラムの質の低下が顕著であることから、体験プログラム造成ノウハウやガイディング手法の研修を行い、ファシリテーターによる実践的なサポートを行う必要がある。

第3項 派遣学校

1. 成果

アンケート結果では児童の「離島の重要性、特殊性及び魅力」に対する理解が深まったことが示された。また、「派遣後に家庭で離島の話をするが増えた」「長期休みに家族で派遣先離島を再訪した」などの声も寄せられていることから、児童のみならずその家族の離島理解も進んだと考えられる。

本事業の学校教育での活用にも成果が見られた。4月に実施した教員オリエンテーションでは、本事業をカリキュラム・マネジメントに活用するためのアイデアや過年度参加校の取り組み事例の共有及び意見交換を行った。教員オリエンテーションやファシリテーターによる学校・クラスごとの個別サポートが功を奏したことで、多数の学校が本事業をカリキュラム・マネジメントに活用した。3月に実施した教員事業評価会議では教諭・管理職から「児童が主体的に授業やクラス・学校活動に参加するようになった」「クラスが仲良くなった」「クラスの仲間への関心が高くなり、助け合うようになった」などの報告を聞くことができた。

2. 課題・改善案

本事業の学校での活用に関しては、活用できた学校とあまり活用できなかった学校に差が見られた。引き続き、教員オリエンテーションにて過年度参加学校の事例を共有するとともに、学校訪問時には引率教諭全員との意見交換を行い、事業の活用を促す必要がある。

アンケートに関しては、設問数やアンケート回数の多さについて前年度に改善を求める声が教諭から挙がったことから、本年度は設問数を見直して実施した。また、回収率を向上させるため、全て紙ベースでの回答とした。その結果、児童・教諭対象のアンケートは90%を超える回収率となったが、学校によっては回収までに繰り返しの提出依頼を要した。引き続き、設問数や実施手法の見直しを図りたい。

第2節 離島→離島版 総括

第1項 取組概要

南大東島の南大東小 10 名、多良間島の多良間小 15 名の全 25 名が参加した。一年間を通じて、3泊4日の石垣島への体験、自分の島の魅力や将来像について考える「島おこし会議」、考えた内容を首長や地域の関係者に発表する「首長発表」を実施した。

第2項 参加学校

1. 成果

本事業への参加により児童の離島理解の促進や自分の島への誇りの醸成に繋がったことが児童・教諭・保護者のアンケート結果にて示された。児童からは「自分の島は世界に一つしかない良い島だ」「島にあるものを大切にして次の世代に受け継ぎたい」等の声が、保護者からは「自分の島では普通だと思っていたことが他の離島や沖縄本島では違うことを学び、自分の島のことを知ろうという気持ちが強まった」「自分の島のために何ができるかを真剣に考えていた」等の声が挙がり、手応えある成果が得られた。

また、学習面や生活面でも児童は成長した。事業評価会議では参加した教諭が児童の成長を熱く語る場面が見られた。多良間小の教諭からは、住民や観光客に島の魅力を知ってもらおうと「海祭り」を実施して企画・運営・事後の分析までを児童が主体的に行ったこと、その結果児童に大きな成長が見られたことが報告された。特に特別支援児童の変化が著しく、発表が苦手な首長発表では舞台にすら立てなかった児童がその後の学習発表会で堂々と発表したり、派遣に向けた荷造りすら自分でできなかった児童が、派遣時に教わったインパクトライティングの手法を使った作文で賞を取り、自分で荷造りして県外の表彰式に参加したといった成長が見られた。

本事業では東京学芸大学附属世田谷小学校の沼田晶弘教諭を講師として、派遣中や派遣後に教諭対象の勉強会を行っている。一年間を通じた教諭の事業への主体的参画と学び合いが児童の成長に繋がり、教諭自身のスキルアップにも繋がっているものと確信する。

2. 課題・改善案

離島→離島版は年度末に首長への発表を行うまでの通年事業であることから、教諭の主体的参画と本島→離島版以上の時間や労力が必要となる。加えて、年間を通して行事が多い小規模離島では教諭が授業の時数確保に苦慮している状況もあることから、教諭の負担感を軽減するための工夫が求められる。教諭が本事業の全体像を把握し、事業を活用して児童の成長を促せるよう、事業趣旨や年間スケジュールの説明や過年度参加校の事例共有をより丁寧に行い、教諭のサポートを徹底する必要がある。

第3節 離島→本島版 総括

第1項 取組概要

久米島の大岳小 13 名が参加した。一年間を通じて、3泊4日の沖縄本島への体験、自分の島の魅力や将来像について考える「島おこし会議」、考えた内容を首長や地域の関係者に発表する「首長発表」を実施した。

第2項 参加学校

1. 成果

アンケート結果から、自分の島の魅力や沖縄本島との違いに関する児童の理解が深まったことが明らかになった。また、派遣中の AI を活用した振り返り作文、派遣後の「島おこし会議」や「首長発表」の取り組みを通じた児童の発信力の向上も明らかとなった。教諭からは「児童が首長発表で堂々と発表する姿を見たときに成長を実感した」、保護者からは「自分から発表することが苦手だったが、本事業を通じて人前で話すことが増え、学校での発表が増えている」等の声が挙がっている。

また、学習面や生活面でも児童は成長した。アンケート結果では特に児童の自己肯定感や物事への挑戦意欲の向上が見られた。保護者からは「自分の島以外の地域のことに興味を持つようになった」「親元を離れ自立することを意識した」等の声が寄せられた。

教諭からは「自分の中のものさしで『この子にはまだ早いな』と判断して挑戦させることを制限してしまっていたが、なんでも信じてトライさせてみる大切さを感じた」との声が挙がっており、本事業への参加が教諭自身の学びにも繋がったと考えられる。

2. 課題・改善案

離島→本島版は本年度が初の取り組みであり、手探りで派遣行程の組み立てを行った。児童にとって充実した体験となったことは確かであるが、一方で保護者から「スケジュールが過密だった」との声が挙がっている。本年度は単体校の派遣であったため特に問題にはならなかったが、複数校同時派遣の場合には派遣中に教諭と事業スタッフの打ち合わせ時間をしっかりと確保する必要がある。事業の目的を明確にしつつ、ゆとりある行程となるよう見直しが求められる。

また、離島→離島版と同様に、教諭の負担感軽減や、教諭が見通しを持って事業に取り組めるためのサポートも必要である。

第4節 オンライン離島体験 総括

第1項 取組概要

オンライン離島体験は本年度で3年目となる取り組みである。本年度は 10 離島・地域が合計 28 回のオンライン離島体験を実施し、延べ 1315 名の児童が参加した。また、5離島・地域にて新規プログラム 10 種を造成した。全ての参加校が本島→離島版または離島→離島版にも参加しており、派遣前後の学習を兼ねた実施となった。

第2項 受入離島・地域

1. 成果

本年度は 33 種のプログラムを実施し、そのうち6種が新規プログラム、27 種が既存プログラムであった。新規プログラムの造成にあたっては、コーディネーターや離島の住民へのヒアリングをもとにテーマを設定し、教育委員会や島の長老の協力のもと情報の正確性を担保しつつ、映像制作の専門家が入って制作した。また、既存プログラムにおいても、コーディネーター・ナビゲーター・ファシリテーター・事業スタッフでプログラムのねらいや内容を再確認した。その結果、多くの離島で「テーマについての児童の理解が深まった」「プログラムの学習効果を高めることができた」「ナビゲーターを育成できた」との喜びの声が聞かれた。

2. 課題・改善案

本事業では『より多くの島の住民が参画し、喜びと収入が分配される』ことを重視していることから、オンライン離島体験においても、プログラムの進行を務める「ナビゲーター」を島内から広く募ることを目指している。しかし、離島住民にオンラインでの交流に対する抵抗感があることや、1クラス単位での実施によって長時間拘束されることから、ナビゲーターの確保に難航する様子が各離島で見られた。引き続き、オンライン離島体験に興味や親しみを感じてもらえるよう、ナビゲーター経験者や参加児童の喜びの声を広め、実施の様子を映像等で共有したい。

第3項 参加学校

1. 成果

オンライン離島体験に参加するかどうかは学校の意向次第であったが、早い時期からオンライン離島体験への参加を呼びかけていたこともあり、前年度と比較してもスムーズに参加に繋げることができた。

また、プログラムの満足度・学習効果についても評価が高かった。派遣の事前事後学習として活用したことで相乗効果が上がり、離島への関心や理解が深まったことがアンケート結果や教員事業評価会議での報告から伺えた。児童からは「発表して島の人に『すごい』と言われるのが嬉しかったから、これからは思ったことはきちんと人に伝えようと思った」「派遣のときに疑問に思ったことを派遣後のオンライン離島体験で理解することができた」等の感想があり、教諭からも「動画やクイズが盛り込まれていて児童が関心を持ちやすかった。多岐にわたる内容で面白かった」「派遣のときには気づかなかった内容を学べたことで離島のことをより深く知れた」との声が挙がった。

前年度に引き続き、実施前には打ち合わせやインターネットの接続テストを行い、環境を整えて本番に臨むことができた。

2. 課題・改善案

参加決定後の日程調整の難しさが課題となった。実施にあたっては学校・コーディネーター・ナビゲーター・ファシリテーター・事業スタッフの5者の日程を合わせる必要があり、また、1クラス単位での実施によって拘束時間が長いことから複数の学校で実施日の確定に時間がかかった。オンライン離島体験に興味は示しつつも参加には至らなかった学校もいくつかあり、日程調整の困難さや学校の多忙さがその理由であった。

引き続き、早い段階から参加を促すとともに、オンライン離島体験の価値を粘り強く伝えることで普及を図りたい。